震動人

発行人　金沢真宗学院
代表者　髙 桒 敬 和
金沢市安江町 15-52
金沢教務所内
電話　076-265-5191

第 31 号

宿業の身を通して

金沢真宗学院同窓会会長　荒 木 範 夫

人間とは何だ、何の為に生きているのか、夫婦、親子、家族って何だ、何の為に仕事をするのか？何となく考えることがあっても、現実がそれなりに成り立っていればそれでよかった。

ところが、突然に娘が九歳で難病にかかり、五年間死と向き合いながらの闘病生活が始まります。なんとしても、どうしてでも、たすけたかった。でも、娘は皆の見守るなか、最後の力をふりしぼって「アリ、アリ、」と言って、いのちを終えていった。妻と目が合った瞬間「ありがとう」だと、気がついた。何と愚かな父親であったのか、こっちの方こそ「ありがとう」と言ってやりたかった。

何で私ばっかりこんな目に遭わねばならんのか、一体どんな悪いことをしたというのか、四十八才で脳梗塞になった父に代わってひたすら家族のためにがむしゃらにがんばってきたのに…。今まで、知らず知らずのうちに頭に描いていたものが、ガラガラと崩れていく。何も手につかない、むなしい、こんなにも子どもの存在が大きいものであったのかと思い知らされる。

でも生きねばならない。家族との生活がある。…そんな思いの中、脳梗塞になり不自由な体で仕事もできず、心のすき間をうめるべく寺巡り、仏法聴聞に明けくれる父の姿を思い出す。できないのに御講のお世話をすると言って私にまかせっきり、そんな父のことを疎ましく思っていた。そんな父が五十五歳で心筋梗塞になり「今回はだめだ枕元に居ってくれ」と言って医者の帰った後静かにしていたのに突然、天に手をつき上げて、「南無阿弥陀仏」を五遍称えて、いのちを終えていきました。

この時、私はせめて亡くなる時位は「世話になった」とか、「皆のことをたのむ」とか、「商売がんばれ」とか言いたいことがあるだろうに、何で「南無阿弥陀仏」なんや、と思っていました。それが、今は子どもに死なれて、子どもに何もしてあげられなかった自分の相（すがた）を通して父親の気持ちが見えてきたのです。親とは能力があるから親になるのではなくて、親になる技量があろうがなかろうが、縁を頂くと子どもの幸せを願い、その子のためなら何でもしようとするのが親なのだと、それだけ親にとって掛け替えの無いのが子どもなのだと。

思えば親らしいこともできず、苦しんでいた父が最後にいのちをかけて、私に、このこと一つ「南無阿弥陀仏」と共に生きよ、と、伝えていったのかと思うと、知らぬまにお内仏の前で「父ちゃん堪忍してくれごめんな」と泣いている自分がいました。子どもの頃は母の実家である寺にお世話になり、父が脳梗塞になってからは、父の後姿を見ながら、いやいやながらに聴聞につき合わされ、御講の御世話をさせて頂いて沢山の先生方に長い間御育てを頂きながら、自分の問題になっていないことに気づかされました。それは、死ぬ前に書いた娘の作文でした。

「生きる喜び」荒木三千子
なかの一部の文章

…つらいこと、悲しいことなどいろんなできごとがありました。でも、くやんでなんかいません。かえってよかったと思っています。ふだんあたりまえのように思っていたことが、今では喜びとなり健康で生きていけることは本当にすばらしいことだと気づかされたからです。

とあります。父と娘がいのちをかけてくれた私への課題をもう一度自分の問題として問うていきたいと思います。　合掌

講師からの言葉
ー特別講義を終えてー

先日、ある葬儀社の生データを関東地方の市役所で見せてもらった。コロナ禍が収まり始めた二〇二二年末に、この会社が扱った葬儀式の詳細な分析だ。こうしたデータを見る機会はほとんどないが、市の福祉職員が「仕事上必要だから」と懇意の会社から取り寄せたという。

データによると、葬儀式をしない「直葬」が三十四％だった。この職員は「コロナ禍も落ち着き始めた時期に、直葬が三分の一もあるのか……」と嘆息した。直葬はもともと、路上で亡くなった身元不明者を「直接、火葬場に送る（直送）」といった警察用語が語源とされる。二〇〇〇年代に入り首都圏の葬儀関係者が使い始め、全国に広がった。

無宗教だから直葬なのだ、と決めつけないほうがいい。同社データでは、故人の宗教を「仏教」と答えた遺族のうち十一％が葬儀式をしなかったという。ちなみに「ゆうパック」に詰められて葬儀社に届いた「送骨」は五％あった。

「死んだ人はほとんどが仏式で弔われる」というのは、もはや日本の常識とはいえないのかもしれない。

私は「周死期」をテーマにして取材をしている。人生最終盤の医療、介護、みとりから、「死」をはさんで、葬儀、火葬、墓のことを通してみていく。そのほうが人の理解は深まるし、社会の変容がよくわかる。その視点からすれば、一九九〇年以降、平成期の約三十年はまさに激変の時代だった。多くの人が人生最終盤に備える「終活」を考え始めたし、没後は「家族葬」が主流になり、「散骨」という新しい葬法があっという間に浸透した。日本人は変化することをあまり好まないが、いったん変わり始めると、一気に、そして大胆に変わっていく。

この激変のいちばんの要因は単身世帯の急増だと考える。全世帯の三十八・一％（二十年国勢調査）で、国の想定をはるかに超える速度で単身化は進んでいる。しかも、経済的に余裕のない一人暮らしが増えているのが特徴だ。評論家の樋口恵子さんは貧困に直面しているいまの単身高齢女性を「B・B（貧乏・ばあさん）」と呼んで支援の必要性を説いているが、平成期は経済格差が進んだため、数十年後、こんどは現在五十歳前後の団塊ジュニア世代の単身・貧困化が懸念される。

「おひとり様」などと呼ばれていまは持ち上げられているものの、単身生活を続け、何かのときに身内の「保証人」になる人がいなければ、たとえば入院・施設入所さえ拒否される。それが法律のあちらこちらに「家族前提主義」が残る日本の現実である。「その時」になって、いきなり生活は破綻する。

ひとり孤立し、不安を抱えている人たちを誰が支えていくのか――。有力な担い手の一つが寺院だと、私は考えている。

米国の有名な経営学者ドラッカーは、日本の寺を「最古の非営利組織（NPO）」と呼んだ。それは寺というものが世俗とは異なる空間を持ち、なぜかしら人をひきつけるという機能を持っているからだろう。「場」はある。ただ、お坊さんがそのことを意識しているかどうかが問題だ。

私の知るお坊さんはみんな善人だ。苦しむ人のために何かをしてあげたいと常に思っている。ただ、まだ受け身だ。もっとまちに出て、寺という豊かな空間に人を引き入れてほしい。「子ども食堂」でも「大人食堂」でもいい。食糧給付の場を設定すれば、びっくりするほど人は集まる。それだけみんな苦しんでいる。訪問看護ステーションをつくり、終末期のケアにかかわってもいい。「あの世」について語れるのは宗教者だけなのだ。子育てに悩む若い親たちのために、時間のある檀家の高齢者とマッチングしてはどうだろう。先駆的な寺はある。だが、まだ広がっていない。

AI（人工知能）の技術が進み、対話型のサービス「チャットGPT」がもてはやされている。インターネットはとても便利だ。ただ「情報」は入手できても、老・病・死の根源的な悩みについて誰かと語りたいと思う人は多い。人の悩みは人でしか解決できないから。「だったら、寺があるじゃないか！」とお坊さんが胸を張って言ってほしい。寺には色んな人が出入りしていますよ、と。

そう考えていくと、「周死期」というのは、実はお坊さんたちの大事なテーマなのではないか、

と思う。生きてるうちから関わりがあるから、死んだあとも安心して任せてもらえる。寺に関心がある人は、お坊さんが考えている以上に多いというのが私の実感だ。寺の門を出て、多くの人の悩みに耳を傾けてほしい。私は切にそう願っている。

○滝野隆浩　たきの・たかひろ
毎日新聞専門編集委員
（毎週日曜紙面でコラム「掃苔記」連載中）

キャンパスレポート

三年生　佐野　佳代子

私は五年前に、亡くなった夫の実家のお寺を手伝おうと思い学院に入学しましたが、授業は難しく、分からないことだらけで、学校に通うのがだんだんしんどくなり、家庭の事情も重なり、一年生の時の七月に休学をしました。

三年間休学をし、復学をしても在籍期間の六年間で無事卒業できるか心配でしたが、先生方のご指導や、共に学ぶ仲間との出会い、家族の支えもあって、何とか二年間を終えることができました。

前期修練では、朝からの大雨のため列車はすべて運休、高速バスはすでに満員の状態に陥り、米原からなら快速電車が出ているとのことで、福井駅からタクシーで米原まで行くことにして、大雨で足元がびしょびしょになりながらひたすらタクシーを待ちました。なかなか来ないタクシーを待ちながら、京都に行けないのではないかという不安と、苛立ちから泣きそうになってしまいました。

夕方になりあきらめかけた時、義弟が、駆けつけてくれ、車で米原まで送ってくれて、無事電車に乗ることができ、夜にやっと京都に着くことができました。その時はなぜこんな困難に合うのかと思いましたが、今ではいい経験だったと思います。

今までは困難や悲しいことがあるたびに、なぜ自分ばかりがと思っていたのですが、真宗を学ぶうち、生きるということは色々なことがあるということを、素直に受け止めることができるようになりました。

後一年で卒業ですが、復学をして本当に良かったと思います。残りの学院生活は貪欲に楽しく悔いのないように、感謝の気持ちを忘れずに過ごしたいと思います。

三年生　小阪　大

真宗大谷派の寺の長男に生を受け、小学校五年生時に得度を受けました。それから四〇年、お盆の墓参りや報恩講、お葬式には携わってきましたが、真の大谷派僧侶とは、何なのか考えないまま五〇歳半ばを迎えました。父である住職も元気で、教師資格については、三〇歳ころからいずれ取ろうと安易な考えでした。

そういった中で、自分が生まれ育った環境に浄土真宗の教えがあることに気付かされました。私が育った医王山山麓には蓮如上人が通われた寺院や名蹟があります。二〇代後半から職場としてお世話になった鶴来町や白山麓には、蓮如上人やその子息、同朋にかかわる寺院や遺跡があります。これらの地で、先人達が残された墨跡や歴史事実に触れる機会を得たときに、その当時の同朋の苦悩や葛藤の過程に感動させられる事があります。

金沢真宗学院へ通って三年目を迎えようとしております。この学院生活では、親鸞聖人の人生や教えをもとに自分を見つめ直す大きな機会

だと思います。御聖人が顕浄土真実教行証文類序の冒頭で記す「ひそかにおもんみれば…」の表現が心に響きます。この言葉の意味には阿弥陀仏の前で「南無阿弥陀仏」を称えたときに、真の自分を、外から俯瞰することができるような気がします。自分は何者か、何故生かされているのかを考え、日々精進して行きたいと思います。

二年生　澤野　俊英

真宗学院に通学するにあたり不安だったことは、「会社員と学院生の両立ができるか」という点でした。授業がある日は朝六時台に家を出て、夕方まで仕事をした後、急いで電車に乗って、授業開始時間ギリギリに真宗学院に到着する生活で、学ぶモチベーションや体力を維持できるかを懸念していました。

そんな中で、まず一年間無事に学びを続けられたのは、同級生の存在でした。自分よりもはるかに長い距離と時間をかけて通学する同級生や、同じように会社員と両立しながら通う同級生など、それぞれ大変な思いをしながら、ここで学んでいることを伺うことで、自分も頑張ろうという気持ちになったと同時に、「仕事も学びも頑張っている自分」に浸っているような自分の気持ちにも気づかされ、もっと同級生と同じように素直な気持ちで学んでいこうという思いを持つきっかけにもなりました。

授業では一貫して「問いを持つ」「問われる」という機会が多いのですが、正直に言うと、「問われる」とは何か。その問いに対する自分の答えはなにか。わからないことだらけです。

これまでの学校や職場での経験では、与えられた問いに対して、すべての受け手から平均的に七〇～八〇点をつけるような答えを出すことが求められてきました。一方で、私の人生においての問いは、自分が自分に問いを投げかけること、そしてその問いに対し、真剣に向き合い、もがくことが求められているように感じます。

残りの二年間、これまでの経験や価値観を大切にしながらも、それに囚われることなく自分自身に向き合い、もがき続けることで、自分への問いやその答えに近づきたいです。

二年生　末森　逸子

真宗学院に通い始めて一年が経った今、去年のちょうど今頃を思い返してみると、自分の環境や仏教・法務に対する考え方等、何もかもが変化した一年間だったなと思います。

私は持病を抱える父と多忙な夫の助けになればと、真宗学院への入学を決意しました。次世代の自坊の姿を考え、女性である自分も積極的に法務に携わっていきたいという希望もありました。子どもがまだ小さいため不安でしたが、家族の協力のもと、何とか一年間通うことができました。

実際に授業を受けてみて、私は、自分が自分と向き合うこと、学び続け、問い続けることの大切さを感じました。「私にとって」「私とは」という視点は、今までとは全く違う考え方を自分に与えてくれました。分からないことも多くありますが、「分からない」で終わらせず、そこから一歩深めていける自分でありたいと思っています。

また、同期の皆さんの存在はとてもありがたいものだと感じています。闘病中だった父は、一年生の授業も後半に差し掛かった秋頃、亡くなりました。私は突然自坊の法務・事務を多く担うことになり、慣れないことばかりで体力的・

卒業式勤行

精神的に負担を感じてしまい、今後も学院に通い続けるのは本当に無理だと思いました。しかし、その時に自分の支えとなったのが、同期の皆さんであったと思います。皆さん本当に温かく、同じ目標に向かって努力している心強さを感じます。これまで何人もの指導の先生が「学院の仲間を大切に」とおっしゃっていましたが、まさにそのことを実感する日々です。

今はまだ毎日に余裕のない自分ですが、真宗の教えを聞き、守りながら、お寺に生きるご縁を心から喜び、感謝できる私になりたいと思っています。

真宗学院を卒業して

二〇二二年度卒業　柳瀬　悦子

宗教を拠りどころにするということについて、今までは、「宗教に頼って生きるのは、弱い人の生き方だ」「宗教に寄りかかって生きることは、主体性が無くなり、自分らしさを封じ込めて生きることだ」と思っていました。

人間のいのちの真実を学ぶなかで、無量寿如来に見守られ、不可思議光に照らされることにより、本当の自分に出会うことが出来て、より主体的に自分の人生を送って行ける様に思います。自分にとって、何が大事なのかをしっかり見定めることが出来れば、自分の人生を迷いなく歩んで行けると思います。

「念仏とは何か」を考えました。「知恩報徳」という言葉が仏の用（はたら）きにつながるのではないかと思います。「私のまわりの人々の恩を感じ取ることの出来る私にしてください」という願いと、まわりの人々への感謝の気持ちが、「南無阿弥陀仏」に現わされていると思います。念仏を続けることは、「おかげさま」と、感謝の心を持って生きていくことだと思います。「おかげさま」の心を忘れないためにも、念仏を続けていきたいと思います。

他の人への感謝の心は、「他の人のために何かをしたい」という主体性（自主性）を持った心につながります。

親鸞聖人は、生涯通して、後の人々のために、自己と向き合われ、教えを説き続けられました。これからも、日常生活の中で、聖人の生き様や、お言葉をとおして、教えをいただいていきたいと思います。

私は、幸いにも、この学院で真宗と出あうことが出来ました。これから先も、一人でも多くの方々が真宗と出逢えることを願っています。

二〇二二年度卒業　西井晃英

真宗学院を卒業し振り返ってみると、まず感じる事はこの三年間はとても短く感じ、本当にあっという間だったという事です。通学するにあたり一番のネックは会社勤めとの両立でした。果たして遅刻せずに通えるのかが不安でしたが、会社が学校に通えるように時間の融通をきかせてくれた為、三年間無事に終えることが出来ました。いざ卒業してみると駆け足で過ぎてしまった印象です。

新型コロナウイルスの影響で、国や県からの緊急事態宣言が発令され、オンラインでの授業

2022年度　金沢真宗学院卒業式　2023.3.22（水）　金沢別院本堂

が行われることもあったり、学院の行事や懇親会が中止になり交流の場は少なく、皆が仲良くなるにもかなり時間がかかりました。しかしそのような非日常の中でも、日々の授業、前期修練や、後期修練を重ね、徐々に皆がまとまり助け合うようになりました。

共に親鸞聖人の教えを学び、時には授業でのお話は理解しがたく、教えの意味が理解出来ませんでした。常に自己が問われ答えの出ないことに悶々と過ごした日々もあります。そんな時に共に学ぶ同級生の声や姿に励まされ元気をもらい、また頑張ろうと奮起したのも懐かしく思えます。そんな難しい教えは、意味は分からなくても生活の中の至る所で自分に響いてくるのを少しずつ感じるようになっていきました。自分に向き合えるようにして下さったのも学院の諸先生方のご指導ご鞭撻があり、自分たちに常に問いを投げかけ続けて下さったおかげだと思います。諸先生方だけでなく、学院の運営に携わる皆様にも深く感謝致します。三年間ありがとうございました。

金沢真宗学院特別講義　開催報告

各分野で活躍されている先生方が、指導や学院性に向け、専門的な知識を踏まえて丁寧におく話しされます。

講義内容のほんの一端を紹介させていただきます。限られた文面では誤解や不都合を生じることがあるかと存じますが、学院卒業生をはじめ、皆様方に少しでも教えに触れていただきたく、このような形をもって紹介させていただきます。

2022年度　金沢真宗学院特別講義　開催一覧

No	期日	講師名	肩書・所属等	講題・内容
1	22年5月31日(火)	瀧野　隆浩	毎日新聞　東京本社 社会部専門編集委員	平成期「葬送大変容」と お寺のこれから…
2	22年6月29日(水)	坂谷　学称	本廟部堂衆	声明のこころえ
3	22年7月28日(木)	中山　善雄	教学研究所研究員	『観無量寿経』講義1
4	22年8月25日(木)	藤場　俊基	金沢教区常讃寺住職	『教行信証』講義1
5	22年9月21日(水)	木村　宣彰	大谷大学名誉教授 鈴木大拙館館長	『法華経』と浄土教
6	22年9月30日(金)	清水　研	がん研究会有明病院 腫瘍精神科医師	限りある命を意識して 自分らしく生きる
7	22年11月9日(水)	中山　善雄	教学研究所研究員	『観無量寿経』講義2
8	22年10月24日(月)	松田　彩絵	社会福祉士	若年貧困とカルト宗教2世の 抱える現実
9	22年12月6日(火)	藤場　俊基	金沢教区常讃寺住職	『教行信証』講義2
10	22年12月15日(木)	木村　宣彰	大谷大学名誉教授 鈴木大拙館館長	『涅槃経』と浄土教

平成期「葬送大変容」とお寺のこれから…

瀧野　隆浩 氏

日本の葬送・埋葬は平成期に入って以降、目まぐるしい変化を遂げていった。先祖代々の墓地に納めるこれまでの埋葬から、共同墓地・樹木葬・海洋散骨などそのかたちは多様化し、葬儀においては、「家族葬」・「一日葬」などが主流となった。もともと身元不明者を弔う際の警察用語であった「直葬」は、今や都市部では全体の三割以上とも言われる。傾向として顕著なことは葬儀の「安・縮・短」の流れである。

このような葬送・埋葬の変化の背景にあるのは家族・社会の変容であると指摘される。高齢化・核家族化、未婚者の増加に伴い、単身世帯が急速に増えている。また血縁・地縁の希薄化、地域コミュニティーの衰退の結果、身寄りのない人たちもまた増加傾向にある。自由な生活を楽しむ独り身の良さが喧伝されることもあるが、今の社会において身寄りなく老年期を生きることは、実生活上、様々な面において多くの問題をはらんでいる。なにより身寄りのない単身世帯は、社会のつながりを失い孤立した状況となりやすい。

「死は怖くない。さみしいだけだ。」

これは滝野氏が取材先で聞いた、あるがん患者が漏らした言葉だが、身体的苦痛・生活上の不自由さ以上に、孤独であることは我々にとって深刻な問題なのだろう。

このような社会の中で、お寺はどうあるべきか。今、寺院が置かれている状況は厳しいと言わざるを得ない。存続が危ぶまれているところも多い。それでも「お寺はあってもらわないと困る」ということが氏の結論である。ドラッガーは「寺院は最古の非営利組織である」と述べたそうだが、地域における寺院の役割・機能は今なお大きいという。

寺院は、その多くが長い歴史を有し、世間の価値基準とは違う仏教の伝統の中で受け継がれてきた道理がいきづく場である。またゆったりと流れるその場の時間についても他の施設とは異なるものがある。人生の問題を深く学ぶ場、気忙しい日常から少し離れた癒し場、あるいは孤独を深める人々がつながる場ともなりうるであろう。

地域になくてはならない存在であるにもかかわらず、そこに住む僧侶が、寺院の持っている力の大きさ、その担っている役割の重要さに気付いていないのではないか。僧侶には葬儀や法事など人が亡くなってから初めて関わるのでなく、それ以前からもっと積極的に、そして様々なかたちで社会と関わってほしいと滝野氏は言う。我々が切実に受けとめなければならない要請である。

（平野慶之）

声明のこころえ

坂谷　学称 氏

二〇二二年六月二十九日(水)に金沢真宗学院特別講義「声明のこころえ」が京都本山より堂衆坂谷学称師にお越しいただきまして、開催されました。講義では声明とは何かということからはじまり、お勤めの仕方、発声方法、法要に対する心構えなどをご自身の経験をもとにお話していただきました。まず冒頭に坂谷師より報恩講は勤めるものですか?それとも勤まるものですか?と問題提起されました。私は、報恩講などの仏事をお勤めする時には事前にしっかりと稽古をいたしまして仏事に望むということを大切にしております。ただ稽古を大切にするが故に自分の声がちゃんと発声できているのか。また、ちゃんと発声した音程が正しいのか。稽古を通して私自身のお勤めの学び直しをしているつもりですが、悩みは尽きません。ですので、どうしても私自身がお勤めするものと感じます。しかし坂谷師は古来より勤まるものだとおっしゃいました。それはなぜか、「『御文』は、如来の直説なり」(真宗聖典P八七八)と引用されました。つまり色もかたちもないところから方便法身尊形として現れていらっしゃる阿弥陀如来が働きかけてくださっていて、説法していただいている。そして私たちが如来の代官となってお勤めするということなのだとおっしゃいました。続いて私が勤めるということになると自力になってし

まうと言われて、「ただ如来の御代官をもうしつるばかりなり。さらに親鸞めずらしき法をもひろめず」(真宗聖典七六〇頁)と引用されました。つまり私たちは昔から伝わってきたことをそのままをいただいて伝えていく伝達者であり、そのことが僧侶の原点であり、また私がお勤めするのではなくて、如来の代官として私がその代官を勤めさせてもらっているのだともおっしゃいました。声明の稽古を通して悩みの尽きない私といたしましては、坂谷師の講義を拝聴して、仏事は勤めるのか勤まるのかという問いを大事にして、これからも声明をお伝えすることに、より一層励んでいきたいと感じました。

(冨樫慶吾)

『仏説観無量寿経』概説Ⅰ

中山　善雄 氏

今回の講義の「はじめに」と題して、中山氏は次のように述べられる。

「『仏説観無量寿経』(『観経』)については多くの文献があるが、本講義では主として善導大師・親鸞聖人の『観経』観にもとづいて概説する。二回に分け、初回は『観経』の趣意・全体の構成および序文の課題を、二回目から正宗分定善・散善を学ぶ」と述べておられる。

氏が提供された資料の大要を示しておきたい。

1. 親鸞聖人の『観経』観
2. 『観経』の仏意
3. 『観経』の性格
　a 一経両会(耆闍崛山と王舎城)
　b 一経両宗(観仏と念仏)
4. 『観経』の構成および善導教学の特徴
　a 定善(本願の世界)から散善(人間の善悪の世界)が照らされるという展開
　b 九品は皆凡夫
　c「別時意の難」について
5. 序文・発起序の概観
　a 発起所の意図(化前序、禁父縁)
　b 阿闍世の異名および「是旃陀羅」の諫言(禁父縁・禁母縁)
　c 韋提希の厭離と欣求(厭苦縁・欣浄縁)

このような流れの講義のなかで、印象に残ったことを一点だけ紹介しておきたい。それは、『観経』が説かれた耆闍崛山と王舎城の二つの場所(一経両会)についてである。「釈尊が山での説法を中断して、王宮に姿を現わすところから釈尊の説法が始まり、そして説法が終わった後、釈尊は再び山に帰る」という指摘において、氏は「出世間と世間、宗教と世俗生活(倫理、善悪)との関わりを課題としている」と言及している。このような出世間と世間の関係をもとに、出世間の定善十三観から世間の散善九品の生活倫理へという展開として捉えたことに注目したい。

氏は「一般的な宗教観でいえば、日常倫理から高度な宗教に入るという形になる。しかしそれは、ともすれば現実の生活を軽んずる有り方にもなっていく。善導大師は、定善で阿弥陀如来の本願に出あい、そこから逆に自らの生活倫理(善悪)へと戻り、その問題が照らし出されていく展開になる。本願の真実により、衆生の自力作善・善悪の問題が深く痛まれていく」と述べている。

定善十三観の観法を出世間とし、散善九品を世間も問題として明確に分けて考えることはとても新鮮であった。その一方で、散善九品の中で説かれる三心(至誠心・深心・回向発願心)の課題も浮き彫りになってきたように思う。

(大窪康充)

『教行信証』講義1・2

藤場　俊基 氏

金沢真宗学院特別講義（二〇二二年八月二十五日、十二月六日開催）において藤場俊基氏（金沢教区常讃寺住職）より『教行信証』の講義をいただいた。

次のご指摘に私自身はっとさせられた。それは真宗学院に入られた方々に対して以下の四つを心にとめて実践してほしいという願いをお述べになられたときだった。一つは、ご本尊のある部屋に入られたら最初にご本尊にむかって合掌、お念仏を申してください。二つめは「浄土真宗はどんな教えですか」と訊かれたら「念仏しなさいという教えです」と、自信をもってお応えになってください。三つめは聞法会が自坊であるときは門徒さんから見える位置に座って聴聞してください。四つめは今までお念仏のご縁がなかった方がお念仏申されたときには「よかったですね」と喜んでことばをかけてくださいと。

以上のことが生活のなかでできていただろうかを自問自答してみる。仏法聴聞がなかなかわが身自身の問題にならず、お念仏申すことに自信が持てない私たちに、さらに先生は「（わからないままに）お念仏申してください」と励ましてくださった。

そのことをお聞きしたとき私はふと、東本願寺同朋会館の奉仕団で出会った方のお言葉を思い出した。「（お念仏のことが）わからないから、ますますお念仏のいわれを聞かずにおれないのです」と。さきほどのお言葉と重なるようでとても味わい深い。

先生には三年間で計六回のご出講をいただく予定である。わが身自身が教えられ課題となるお言葉に出遇えることを楽しみにしつつ、学院のみなさまと真宗の学びを深めていきたい。

（細川公英）

『法華経』と浄土教

木村　宣彰 氏

氏は今回の講義の目的について次のように述べられる。

「アジア諸国を通じて『法華経』ほどひろく読誦された経典はないであろう。まさに大乗経典の代表的なものと言ってよい。しばしば「経王」と呼ばれているが、日本の古典文学などにも大きな影響を与えた経典である。天台宗、日蓮宗から最近の新興諸宗教に至るまでみな『法華経』を所依の経典としているし、他の諸宗派の祖師もこの経典を尊重している。そこで『法華経』と浄土教の関わりについて考えてみたい。」

『法華経』を学ぶ前提として、日蓮の四箇格言（念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊）とあるように、日蓮と念仏はいかにも敵対関係にあるようだが、『法華経』そのものは宗派に属されるものではない。親鸞自身が比叡山で二十年間も学ばれた経典をどのように見ていくのか、その視点を大事にしてほしいということである。

氏は、導入として後白河天皇が編纂された『梁塵秘抄』の法文歌について語られ、古典文学に与えた『法華経』の影響力について触れられる。

そして、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』（以下『法華経』）の構成について述べられた。『法華経』（八巻・二十八品）は、前半の「迹門」（十四品）と後半の「本門」（十四品）の二つの構成によって成り立っており、それぞれの眼目である「方便品」と「如来寿量品」を中心に考察される。

「迹門」の「方便品」では、出世本懐（仏がこの世に出演する究極の目的）が説かれており、それを三乗（声聞・縁覚・菩薩）の方便と一乗（仏）の真実との関係性から、最終的には三乗を開いて一乗を顕す（「開三顕一」）ことによって、三乗は仏に成るための方便であることが顕されるのである。大乗経典を代表する『般若経』や『維摩経』、『華厳経』などで排斥された二乗（声聞・縁覚）であっても、舎利弗などの声聞の授記を踏まえた上で、最終的には真実の一乗思想によって仏に成ることが顕されるのである。

続いて「本門」の「如来寿量品」では、久遠実成の本仏が明かされる。二千五百年前に誕生した釈迦仏は、我々を導くための方便のすがたであるとし、その釈迦仏を仏たらしめている本仏は、実に成仏してより已来、無量無辺阿僧祇劫を経ているとされ、それより常にこの娑婆世界で滅度せず説法教化し、またその他の百千万億那由他阿僧祇劫の国でも衆生を導いてきたというの

である。その久遠実成について具体的に名前がないことから、親鸞はその久遠実成の仏と阿弥陀仏を重ねたのではないかと、氏は次の和讃などから推定される。

「久遠実成阿弥陀仏　五濁の凡愚をあわれみて　釈迦牟尼仏としめしてぞ　迦耶城には応現する」（『聖典』四八六頁）

親鸞は、『法華経』に見切りをつけたというのではなく、この経典が提起している問題に対して具体的に応えたものが『大無量寿経』であるという見方を添えて講義を終えられた。

（大窪康充）

「限りある命を意識して自分らしく生きる」

清水　研 氏

がん患者を専門とする精神科医である清水研先生より、老いや死が意識され始める中年期以降の人生をいかに生きるかについてお話いただいた。

人生も後半に差し掛かると、「努力すれば自分はずっと成長できる」という幻想は崩れ、尻すぼみの将来を前にして呆然自失の状態に陥ってしまうことがある。「ミドルエイジクライシス（中年期の危機）」といわれるこの危機は、これまでの歩みの根幹をなしていた人生観や世界観が崩れてしまうという点において、がん患者が直面する課題と共通する。

我々の多くが生きていく上で、より優秀で、社会にとって有益な存在になろうと努力を重ねる。あるべき姿を描き、その目標に向かって歩むことは大切なことのように思えるが、この歩みは老いや病によって容易に行き詰ってしまう。先生はこのような生き方をMust（こうあらねばならないという規範意識）と呼ぶ。Mustの傾向が強い人ほど、他人や社会に求められる者になろうと励み、またそうならなかった場合には厳しく自分を責めるようになる。病によって頑張れなくなった自分、役に立てなくなった自分を嘆き憎むがん患者には、このMustが強い人が多いそうである。

講義ではそのようなMustの生き方から、Want（生まれながらに持っている動機、好奇心）のあり方に変わることの重要さが語られた。根源的ないのちの要求に従い生きるWantが主になることによって、私たちは本当の自己肯定感を持って生きられるという。

がんを罹患し深く絶望する者が、悲しみや怒りの感情を経て、自らの人生を納得し全うしていく姿を先生は何度も目の当たりにしてきた。ある人は、限られた人生の中、「今日」のありがたさを知り、自分が本当にするべきことは何かを考えるようになった。またある人は、当たり前にいた身近な人たちが、かけがえのない存在であったことに気づいていった。彼らに生じた変化や気づきとは、自分にとって本当に大事なことに目覚めていくことであった。

そして同じように強いMustに縛られていた先生自身も、病や死と向き合うがん患者との対話を通して、社会的な価値観や規範意識の中に籠って生きるのではなく、Wantの声を聴くことを心掛けるようになっていった。

ひたすら世間に合わせていく生き方では、本当に大切なことが何かわからないまま、人生は幻のように終ってしまうかもしれない。我々を襲う危機が、実は人生の豊かな意味をひらく大事な契機であるということを教えられた。

（平野慶之）

『仏説観無量寿経』概説Ⅱ

中山　善雄 氏

前回と同様、氏が提供された資料の大要を示しておきたい。

1. 前回のおさらい
2. 序分　散善顕行縁（散善は行を顕わす縁）
3. 序分　定善示観縁（定善は観を示す縁＝定善は他力・信心による観であることを示す縁）
　a 仏力（本願力による観）
　b 凡夫の自覚（信心、懺悔）を与える観
4. 正宗分　定善十三観（日想観、華座観）
　※二河譬と対応
5. 正宗分　散善（九品）

氏はまず、序分の「散善顕行縁」で三福（世福・戒福・行福）が説かれている理由を、善導の解釈

にもとづいて説いている。すなわち散善は、韋提希が請わずして、仏自らが説かずにいられなかった、もっとも深い宗教的課題である。序分において、まず散善が説かれたのは、身近な世界、そして現実の善悪の世界にかえることにこそ、宗教的課題があることを示すためであると言われる。

次に序分の「定善示観縁」について、「他力による観であること、凡夫の自覚と懺悔を与え、それにより如来・浄土の大悲が見出される観であることを明かす」とあり、「定善は他力の信としての観を示す縁」であると述べられた。

いずれにしても「序分」の「散善顕行縁・定善示観縁」は、正宗分で説かれる定善・散善の性格を位置づける段（どういう問題意識で説かれるのかを確認する段）であることを押さえられた。

その流れをうけて、次の「正宗分」の「定善十三観」では、第一の日想観と第七の華座観を取りあげて説明された。日想観では、善導の解釈を通して、自我の執着、懺悔、自らの罪業について言及される。次の華座観では、韋提希が無生法忍を得たそのさとりの内容について、本願力への目覚めと凡夫の身の自覚について追究されたのである。

最後に「正宗分」の「散善九品」について、氏は「定善において如来の本願（第十八願の至心・信楽・欲生という如来のこころ）に出あい、如来・浄土の世界に摂取された衆生が、現実の善悪の世界に帰るところにどのような生活が開かれるかを明かす」と述べられる。散善の段では、上品上生から下品下生の九つの人間の在り方が記されるとして、いずれも三心（至誠心・深心・回向発願心）を具えれば、必ず浄土に往生するという点に言及されながらも、それは修める行の内容よりも、修める主体（信）が真実であるかが問われているというのである。

限られた時間において、二回にわたって『観経』の講義をいただいたが、いずれもレジュメに沿って丁寧に説明をいただいた。

（大窪康充）

若年貧困とカルト宗教 2世の抱える現実

松田　彩絵 氏

二〇二二年十月二十四日十八時より金沢真宗会館ホールにて、金沢真宗学院の特別講義として、LETS仙台の所長であり、社会福祉士である松田彩絵さんに「若年貧困とカルト宗教2世の抱える現実」という講題で講演をしていただいた。

二〇二二年は、カルト問題に取り組んでいるものとしては特別な年であった。その年の七月八日に元首相である安倍氏が銃撃されて死亡した事件があり、その事件の背景にカルト2世の抱える苦悩の現実があったからである。

カルト宗教2世の問題については、松田さんはその事件が起こるずいぶん前からLETS仙台の活動を通して取り組んでおられ、いろんなケースを経験しておられた。今回の講演は、その具体的な経験を通して気づかれたことをお話しいただいた。

まず仏教系新興宗教2世の男性についてお話しされた。両親が宗教にのめり込んだことが原因で非常な貧困に陥ったにもかかわらず、両親がその貧困の原因が宗教にあることを他者に知られるのを嫌がったため、生活保護を福祉事務所に伝えることが難しく、大変苦労したという事例だった。

他にはキリスト教系新興宗教2世の女性についてもお話しされた。松田さんの元へ彼女から相談が入ったのは彼女が大学2年生の時だという。相談後も日々精神的に衰弱していき、「もう死にます」と何度も訴えがあったという。この女性についてはカルト問題に明るい牧師さんの助けもあって、警察署にもこの問題の深刻さを理解してもらうことができて、署と連携しながら生活保護の申請をすることができたという。一般的にはスピリチュアル・アビュース（宗教的虐待）に起因する生活保護申請というのはほとんどないから、カルト問題に明るい宗教者の助けがないと、そういう救済の仕方はかなり難しいという。

私が松田さんの講演を聞いて初めて知ったのは、カルト宗教2世の抱える最大の問題は「制度的支援を受ける発想に至らない」という点だということである。カルト宗教2世には「お金は自ら稼いで献金するものであって、人からもらう

ものではない」という刷り込みが強くあるためだという。

宗教に関わるものとしては、カルト宗教2世の方から相談を受けた場合、その苦悩についてどこまで聞くことができるのかが問われていると思う。しっかりと苦悩の声を聞き取るためには、カルト問題についての学びを深める必要がある。松田さんの講演を聞いてそのように思った次第である。

（平野喜之）

特別講義の様子

『涅槃経』と浄土教

木村　宣彰 氏

はじめに『涅槃経』の三種について紹介される。それらは、曇無讖訳の『大般涅槃経』（四十巻）、法顕訳の『大般泥洹経』（六巻）、慧厳等の訳の『大般涅槃経』（三十六巻）である。

経題にある「涅槃」とは、サンスクリット語（梵語）のニルバーナを音訳したものである。

「般涅槃」の「般」（pari）は「完全な」という意味である。完全なニルバーナを意味する「般涅槃」は、多くは「死」を意味し、あるいは「さとり」を意味している。ならば「完全なるさとり」とは一体どういうことなのだろうか？

氏は、釈尊の入滅時の説法について取り上げ、小乗と大乗の『涅槃経』の比較から、「般涅槃」（完全な涅槃）は普遍にして不滅であり、その仏の本質とは、目に見える肉身にあるのではなく、その肉身の仏を仏たらしめている「完全なるさとり」ということであると言われる。

このようなことを踏まえて、『涅槃経』の二大眼目である「仏身常住」と「悉有仏性」の課題へと展開されていく。

一つめの「仏身常住」は、「如来は常住にして変易有ること無し」ということであり、肉身で入滅することなく涅槃に入らない法身とのかかわりから説かれた。この法身とは何か。『涅槃経』は、仏の本質である解脱と法身と般若の三徳について触れられ、法身を含む三徳が、「三にして一」「一にして三」という不即不離の大涅槃であり、『涅槃経』の中心的な教理となることを説かれる。さらに真の仏とは、無常・苦・無我・不浄ではなく、常・楽・我・浄であり、そのような性質を踏まえて「仏身常住」について説明された。ことに『涅槃経』の「仏身常住」が、『法華経』の「久遠実成」や『大無量寿経』の阿弥陀仏と重なっていることに触れられたことは非常に印象深い。

次の「悉有仏性」についてそれは、単に仏性という実体的なものを保有するということではなく、一切の衆生が仏に成り得るという意味である。すなわち、現在は未だ仏ではないが、将来には仏と成ることが可能であることを「悉有仏性」というのである。

そこで問題になるのは、唯除として説かれる一闡提の存在である。断善根、信不具足、極欲などと訳されており、成仏する因をもたないものとされ、一闡提に仏性が有るか否か、成仏するか論じられている。一闡提には仏性を認めるが、因果を信ぜず、慚愧あることなく、業報を信じないもの等と定義を下していることなどから成仏を説いていない。ところが最後は、闡提の不成仏を肯定しながらも成仏の可能性を認めていく。闡提は闡提の状態を離れて、その上で成仏が可能であるというのである。

このような矛盾をどのように捉えればよいのだろうか。まさしく一闡提とは誰のことなのか？

また誰が一闡提と判断するのか？　ここに救われていく背景に、絶対的な他力の存在を想定せずにはいられない講義であった。（大窪康充）

卒業後の歩み

金沢真宗学院を卒業されてからの聞法生活について、寄稿いただきました。

「顔」

福嶌　英子

マスクが取れて、久しぶりに生の顔が見られてほっとしています。目だけの顔はやはり不気味で不安。だが、反対にといえば変だが、自分が顔を見られないマスクはなんか安心。これも不気味で不安です。

もう三、四十年も前のずいぶん昔のことですが、別院だったか、どこかのお寺の本堂だったか記憶が定かではないが、高史明先生のお話を聞いた時のことを、思い出しました。

「金沢の方は、ほんとうにいいお顔をしておられますね」と、にっこりされました。その次に。

「さあ、しかし五十年後には、どうなっているでしょうね」と。

その頃出会った六十代七十代のお年寄りはほんとに、とてもいいお顔をされていました。

今では、もうみなさんお浄土に帰られた方ばかりですが、MさんもSさんも、KさんもUさんもIさんも、どなたもほんとにいいお顔、また会いたくなる、そんな顔でした。

私は、その時「いいお顔ですね」と、褒められたところばっかりで、うれしがって、後の「五十年後……」の言葉が全く気にならなかったのです。そして、(ああ、あんな顔のおばあさんになれたらいいなあ)と思っていました。

今私は、そのいいお顔の人たちが亡くなられて、その人たちよりもずっとずっと年取って八十歳を超えてしまいました。

ぐっすり眠って気持ちよく起きた朝、鏡を見る。

「うん、なかなかいい顔をしておる」と、鏡につぶやく。

夜また、鏡を見る。すると、そこには小憎らしいばあさんが写っている。朝起きたすぐから、連れ合いのじいさんに洗うもんはちゃんと洗濯機にいれてよ、はよゴミ出してきてよ、などなど文句を言い、自分の手が思うように動かんと愚痴り、出会った人にお世辞を言い、テレビに腹を立てと疲れ果て、まるで鬼婆が写っているではないか。良いお顔が、一瞬で消えているのに、夕方いや夜まで全く気づかない。

ふと、珠洲の涛了恵先生の声が聞こえる。どこかの報恩講の法話だったかな。

まだ、本堂に椅子のないころ、気がねそうに、足に風呂敷をかぶせて前の方に座っている二、三人の女の人に

「あんたら今朝、鏡見て来たか?」と、話しかけられた。

「なーんせんせ、わたしら今じゃ鏡なんか見んわいね」

「なんでや?」

「せんせ、今じゃ、こんな顔見たないわね。色ぁ黒いし、皺だらけやし見たない」

「そうやろ。そんな自分も見たない顔を家のもんは毎日文句も言わんと、みとってくれとる。ありがたいこっちゃな」

「あはははは……」

私には、その時のおばあちゃんたちの顔が、とても明るくて素直な顔に見えました。

高先生も、涛先生もとても厳しいお顔をしておられましたが、その目は深い澄んだ湖のようなやさしさをたたえておられました。

まあ、この顔で、後しばらく生きさしていただきましょうか。(なんまんだぶつ)

一日研修会

松扉　覚

今年度は「わたしにとって真宗の仏事とは」というテーマで、２０２３年２月18日に一日研修会を開催しました。初めに各学年の代表者と安部指導による問題提起があり、その後は班別で座談を行いました。

一日研修会（学年混合班別座談）の様子

まず、一年生の越村貴美さんから「寺に住みながらもそこに助けがあるとは思えない中で聖書に出あった。そこには答えが書いてあった。その私を真宗の僧侶である夫が理解しようとしてくれた時、真宗を学んでみようと思った。聖書との出あいがあったから、いま真宗に出あえた。真宗の仏事とは、私の生活すべてではないか」という提起がありました。

続いては二年生の朝倉留美子さんの「二十年前に御講がなくなりコロナで仏事もなくなったが、草むしりも仏事なら、毎日の生活が仏事かもしれない。真宗門徒にとって報恩講は一番大切な仏事であるが、報恩講も掃除から始まるのだ」というご自身の生活からの提起でした。

最後に三年生の龍山　覚さんから「学んだことを日常生活で実践することはとても難しい。けれど、真宗の仏事に関わってきたからこそ、自分の殻を破り少し前を向くことができた気がする」とご自身の歩みからの提起がありました。

安部指導は学院生の問題提起を受け「三六五日が報恩講だ」という先達の言葉を紹介し、今回のテーマはポンとわかるものではなく時間をかけていくしかないと、日々の法務での気づきや出会いを話されました。実感のこもった「仏事を通して人に出会っていく。いろいろなものをいただいて考えさせられる。そして、問いかけられるのだ」という言葉がとても印象に残りました。

座談に関しては、各班十名以上となったことを反省しています。なかなか通常の授業や特別講義で深められない座談は、この研修会の醍醐味です。座談に重きを置くならば、班数を倍にしてでも五名程度の班で行う必要があるのではないでしょうか。

今回の研修を通し、自身の生活と照らし合わせて真宗の仏事を語る学院生の姿から、仏事とは単に儀式を指すのではないということを強く感じました。また、研修会後には厳しくもありがたい言葉をいただきました。座談で班を共にした代表者から「もっと切り刻んでほしかったのに、がっかりしました」という言葉が返ってきたのです。自分には「私と本気で向き合ってくれましたか」と聞こえたと同時に「あ、この方との関係が始まったな」という感覚が沸き上がってきました。

移動研修会について

木越　祐馨

「教義と儀式の荘厳を体感する」をテーマとして、九月四日に移動研修会を、四十六名(学院生・指導・事務局)の参加を得て実施した。参拝寺院は、勝興寺(浄土真宗本願寺派高岡市伏木古国府)・瑞龍寺(曹洞宗、高岡市関本町)・瑞泉寺(真宗大谷派、南砺市井波)の三ヵ寺である。いずれも巨大な木造建築による伽藍を有し、多くが国・県(富山県)の文化財に指定されている。なかでも瑞龍寺の仏殿・法堂・山門は国宝である。なお研修会後に、勝興寺の本堂と大広間・式台の二棟が国宝となった。各寺の伽藍の構成は、教義と儀式、参詣者の性格によって規定されよう。この視点から三ヵ寺の特徴を指摘したい。

瑞龍寺にて

勝興寺は近世において、越中一国の真宗西方の触頭として触下寺院を統轄した。住持は本願寺の一家衆であり、その権威を示した。さらに加賀藩主前田家子弟の入寺をみ、六代前田吉宗の十男時次郎が法暢と号して住持となった。ところが前田家の世嗣不在により、還俗、十一代藩主治脩となった。巨大建造物はこのような権威を示すいっぽうで、越中一国の僧侶・門徒の集会に必要であり、聞法の場として機能したのである。

瑞龍寺は、二代藩主前田利長(瑞龍院殿聖山英賢大居士)の位牌安置の寺院で、一直線の参道で利長の墓所と結ばれる。仏殿(本尊釈迦三尊)・法堂(利長位牌)・山門の三棟が国宝である。領民の参詣を求めるのではなく、あくまで利長の菩提を弔うための寺院として偉容を示す必要があった。

瑞泉寺は本願寺五代綽如上人を開基として親鸞聖人のおしえを、越中のみならず加賀・能登に伝える拠点であった。東西分派では西方に属したが、のちに東方に帰参、触頭を勤めた。また聖徳太子二才像を奉安、太子絵伝の絵解を通して分かりやすくおしえを伝えた。本堂での報恩講、太子堂での太子伝会によって、多数の参詣者を受け入れたのである。

このような三ヵ寺のあゆみと特徴を踏まえて、改めて真宗寺院と曹洞宗寺院の相違点を考察する必要があろう。統治権力者ではなく門徒の寺院であることが大切との認識を共有できたのではないか。

移動研修会の様子

本の紹介

①仏教ゆかりの植物図鑑

著者　松下俊英(文)大島加奈子(絵)
定価：1、210円

蓮華や菩提樹をはじめ、仏典に登場する様々な植物たち。

そんな植物の名前の由来や、物語を、釈尊（お釈迦さま）の生涯をたどりながら、色彩豊かな絵とともに紹介。植物のみずみずしい世界と仏教の物語を味わう一冊。

②和讃の響き　―親鸞の声を聞く

著者　吉元信暁
定価：1、210円

晩年の親鸞聖人が、真宗の教えを人々と共に声をそろえて讃嘆しようという願いによってつくられた「和讃（わさん）」。

その中から二十五首を紹介し、内容を解き明かすと同時に、和讃全体を貫く親鸞聖人の願いを明らかにする一冊。

※本書は『同朋』での連載に書きおろしを加え、加筆修正を加えたものです。

③薬剤師のための死と向き合う患者のこころのケア

著者　清水　研
定価：三、三〇〇円

二〇二二年度の特別講義講師を務められた清水先生の著書。

つらい病の抱える人に起こる「抑圧」・「解離」・「希死念慮」などの様々な心理、また悲しみや怒りで激しく揺れる感情にどう対応するのか。精神科医である著者が、診療の現場から学んだ患者との向き合い方を多様なケースに応じて紹介する。

④これからの「葬儀」の話をしよう

著者　瀧野隆浩
監修・協力　長江曜子

二〇二二年度の特別講義講師を務められた瀧野先生の著書。

新聞記者として長年、社会の変遷を見つめてきた著者が、平成期以降、大きく変化した葬儀・お墓の今を伝える。孤独死の特殊清掃、引き取り拒否の遺骨、増え続ける無縁墓など、現代を生きる私たちがいかに孤独を強いられているかを知らされる一冊。

編集後記

本山での親鸞聖人御誕生850年 立教開宗800年慶讃法要、そして金沢教区での親鸞聖人750回御遠忌法要が無事お勤まりになった。改めて、私はどんな親鸞聖人にあってきたのだろうか、と考える機会をいただいた。

親鸞聖人のご生涯を辿るとき、以前は厳しい表情を思い浮かべることが多かった。しかし、今はいろいろな表情を想像することができる。昨年関東のご旧跡を巡り、周りの人と日々の生活を送る姿がうかがい知ることができたからである。

この4年間ほど、共に集い学ぶことの有難さを感じたことはなかった。もちろん一人黙々と本を開く時間も大切である。しかし浄土真宗の学びは人にあうことが不可欠だといってもいい。その人の姿、言葉、生活をこの身いっぱいに感じることで聞こえてくることが必ずある。親鸞聖人こそ、様々な生業の人々とのかかわりのなかで聞こえてきたことを、教えにたずね、表現された方であるのだから。

（池﨑　方子）